

片倉鶴陵 医案①

今川橋西宮常七、年三十一、偶ま呃逆を患いて昼夜止まざること十又一日。眼珠高く突出せんとするが如く、舌上微黄色にして白点あり、脈遅緩、已に橘皮竹筴湯の類を用いて効あらず。

寛政三年庚戌十一月九日、齋頭に來て診を請う。之を診するに、臍上動氣あり、乃ち訶子（一匁）、附子（六分）、柿蒂（六分）、人參（四分）、右四味を一貼と作し、日に二貼を与う。夜半に至り、嘔止んで安睡す。次の日に至りて、又発して止まず、乃ち前者に伏竜肝を加え、六貼にして全く愈ゆ。